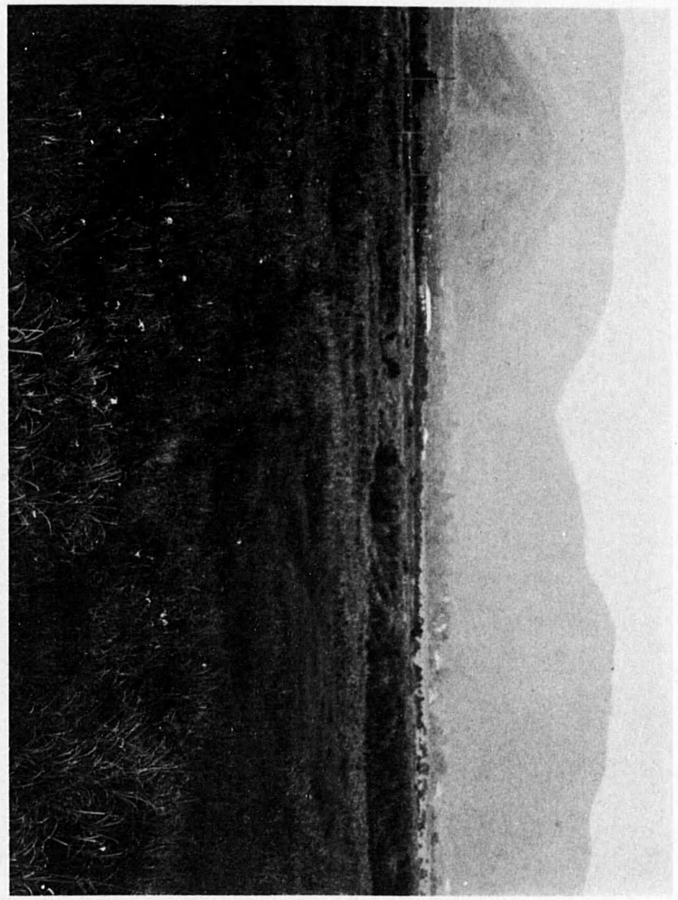
版圖二十七第



箱根仙石原濕原植物群落（遠景）

Hygrophilous plant association at Sengoku on Hakone.
Distant view.

備考　去る昭和二年調査せる同樹の太さは左の如し（「天然紀念物調査報告」植物之部第八輯、昭和三年、第八頁參照）

根廻	約　八・五米
地上一・五米の幹圍	約　六・九八

該報告には尺にて擧げたるが、玆に「メートル」に換算せり。

神奈川縣

箱根仙石原濕原植物群落

所在　神奈川縣足柄下郡仙石原村字大原

箱根仙石原の早川の東方原野の內臺ヶ岳西麓に接する部分には濕原の今日に殘れるものあり。原頭には種々の濕原植物の群落あれども、最著しきは七月中旬開花する紫花菖蒲なり。

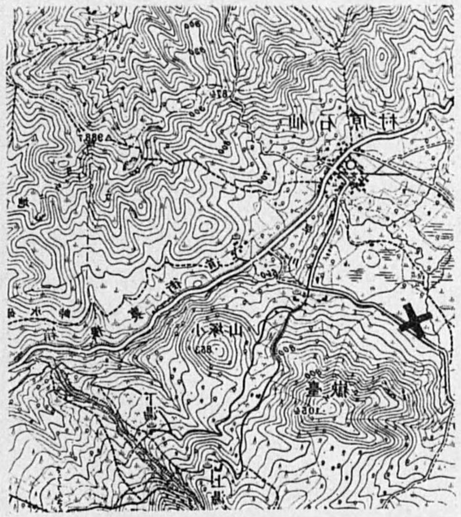
紫花菖蒲（*Iris ensata* THUNB. var. *violacea* MIYOS.）は莖高さ約六五仙米、外花蓋片長さ約八・五仙米、幅約三・五仙米、內花蓋片長さ約三・五仙米、幅約〇・六仙米、蒴長約三仙米、幅約一・七仙米にして、普通の紅紫色の花菖蒲と花の形態は同一なるも、唯花色は全く別にして、濃紫色を呈し、毫も紅紫色のものなきによりて著し。尙此紫花菖蒲は湖尻に達する道路の兩側に生じ、又仙石原の西南部其他の湖岸地域にも產すと云ふ。

調査當日採集せる紫花菖蒲の標本中に全然六瓣花となれるものあるを見たり。斯かる畸態は培養せる花菖蒲には普通なれども野生種に於ては從來觀察されたるを聞かず。斯く紫花菖蒲が自然の狀態に於て六瓣花と化するは培養によりて現るゝ種々の狀態の素因が已に野生の狀態に於て存在するを證すべし。

（紫花菖蒲の記載に關しては帝國學士院記事第九卷第八號、昭和八年十月參照）。

紫花菖蒲の最密生せるは濕原の北部にして、一平方米内十株内外を算せり、概して土壤の稍〻濕潤なる處に多し、

紫花菖蒲の外に著しきはチゴザサにして、殆ど純群落を成せる所あり。其他カキラン・ミヅチドリ・カセンサウ・ヌマトラノヲ・クサレダマ等發生し、又臺ケ岳の斜面に接近せる濕地にはミヅゴケの間にマウセンゴケの生ずるを見る。



× 箱根仙石原濕原植物群落所在地
（陸地測量部五萬分一地圖による）

濕原の一部には小樹叢あり。是れ外部より樹木の侵入せるものにして、コブシ・ガマズミ・サハフタギ・クマヤナギ・ホホノキ・イヌツゲ・サンセウバラ・タニウツギ等より成り、又窪地の一隅に

第七十三圖版

箱根仙石原濕原植物群落（其二）紫花菖蒲
Iris ensata THUNB. var. *violacea* MIYOS. in the hygrophilous plant association at Sengoku on Hakone.

第七十四圖版

箱根仙石原濕原植物群落（其三）ゴヘニオ

Drymotaenium tokyoensis C. Chr. in the hygrophilous plant association at Sengoku on Hakone.

はタニヘゴ（*Drymotaenium tokyoensis* C. Chr.）の發生せるものあり、

濕原植物群落の一部にはワラビ其他の日當りよき普通の原野に生ずるもの、又ヒメヂョウンの如き舶來雜草の混入せるを見る。是れ仙石原の濕原植物群落の次第に不純となれる傾向を示すものにして、一方土壤の乾燥を表すに外ならず。將來土地の開發に伴ひ自然の狀態の愈〻變化するに至らば、濕原植物群落も亦存在を危くするに至るべし。故に今日に於て該群落中適當なる地域を指定して植物分布學考證の爲に保存する必要ありと思考す。

（昭和八年七月十八日調査）

昭和九年二月二十五日印刷
昭和九年三月一日發行

文部省

（東亞印刷株式會社印刷）

終